

大規模スポーツ施設の跡地利用 ～北京オリンピック施設のその後～

北京事務所

はじめに

およそ 1 年前の 2013 年 9 月 7 日、1964 年以来二度目となる東京オリンピックの開催が決まり、日本中は歓喜に沸きました。これから 2020 年までの 6 年間、開催に向けて様々な準備がされていくことになります。また、つい先日までは、韓国・仁川市において東アジア大会が開かれ、ここ中国でも競技の様子が連日放送されるなど、高い注目を浴びました。このような大規模なスポーツイベントは人々の高い関心を呼び、開催都市の知名度向上や世界の都市間におけるプレゼンスの強化にもつながることから、開催に名乗りを挙げる都市は少なくありません。しかし、このような大規模なスポーツイベントには様々な課題も付きまといまいます。その一つが、大会会場となった施設の跡地利用の問題であり、2008 年にオリンピックを開催した北京もまた、開催から 6 年を経過した今もその問題と向き合い続けています。

北京オリンピックの概要

北京オリンピックは、2008 年 8 月 8 日から 8 月 24 日までの 17 日間の日程で、北京市を主な会場として開催された第 29 回夏季オリンピックです。世界 204 の国と地域から 11,438 人のアスリートが参加し、300 を超える種目が行われました。

アジア地域で夏季オリンピックが開催されるのは、1964 年の東京、1988 年の韓国・ソウルに続き 3 回目であり、中国では初開催のオリンピックでした。

2001 年に北京開催が決定して以降、各競技施設に加え、幹線道路の整備や空港の拡張、地下鉄路線の増設など、都市インフラが大幅に増強されました。これらの都市インフラの整備には合計で約 1,800 億元が投入され、その後の北京の近代化・都市化に大いに貢献しました。

主だったオリンピック施設

北京市では、開催にあたって合計で 31 施設が設置されました（この他、サッカーなど北京市以外の会場が 6 施設、合計で 37 施設）。施設整備にあたっては、競技施設の 40%を同一エリア内におさめるオリンピック公園が建設され、その中にメインの競技場として建設されたのが「北京国家体育場」です。この競技場は、その外観から通称「鳥の巣」と呼ばれています。開会式や閉会式、陸上競技や男子サ



北京オリンピックのメイン競技場として建設された
国家体育場（通称：鳥の巣）の外観（国家体育場公式HPより）

サッカーの決勝などといった花形競技が行われた、オリンピック施設の中でも最大規模の競技場であり、最大約 91,000 人を収容し、総建設費は 34 億元に上りました。公園内には、この他にも、これまた特徴的な外観を持った、水泳会場である国家水泳センター（別名「水立方（ウォーターキューブ）」）や、ハンドボールや体操・トランポリンの会場となった、整備された施設の中では最大の室内競技施設である「国家体育館」などがそろっています。オリンピック公園は、総敷地面積が 1,215 ヘクタールに及び、各競技施設のほかに、博物館や展覧ホール、森林公園が併せて整備されました。

終了後の施設利用状況

上述のオリンピック公園は通常時には一般開放されており、市民憩いの場としてだけでなく、広く観光客が訪れる観光スポットともなっています。国家体育場もまた、イベントがない日については一般開放され、1 人当たり 50 円で入場することができます。もちろん、イベントも定期的に行われており、2014 年の利用スケジュールを見ると、陸上、野球、ラグビーや馬術などスポーツ関係はもちろんのこと、2 週間超にわたる野外劇や海外有名歌手によるコンサート、冬季には雪を敷き詰めてフリースタイルスキーの大会や、市民参加型の雪まつりなどが行われています。最近の話だと、2014 年 10 月 11 日にはサッカーの国際マッチとしてブラジル対アルゼンチン戦が開催され、世界のスーパースターのプレーを一目見ようと、約 5 万 2 千人もの観客が集まりました。さらに、来年 2015 年には世界陸上の開催も予定されています。

「国家水泳センター」についても、通常時は一般開放されており、参観だけなら 30 元、実際に泳ぐとしても 1 人あたり 50 円で利用することが可能です。開催時に競技に使用したプールだけでなく、ウォーミングアッププールも開放されており、幅広い層の人々が利用しています。

また、オリンピック公園の外に目を向けると、利用策として目につくのは、会場のうち 6 施設は大学施設として整備・建設されていることです。これら施設は、オリンピックが終了した現在、大学によって管理され、大学の授業や学会・講演会などで日常的に利用されています。

さらには、オリンピック終了後の利用が難しいと思われたフェンシングやホッケーなど一部の施設については、当初から開催期間だけの暫定施設として整備するなど、オリンピック「後」を見据えた整備が当初から行われました。



2014 年 10 月 11 日に国家体育場で開催された「ブラジル対アルゼンチン」戦のポスター



オリンピック期間中、卓球会場として使用された北京大学体育館の入口。「北京大学体育館」という文字の下には「2008 オリンピック卓球会場」という文字があり、その右側にはオリンピックマークが入っている。(新華網HP より)

今後の課題

しかしながら、残された課題は当然数多く存在しています。

国家体育場にしても、上述のようにスポーツだけに頼らないイベントを開催していますが、その利用日数は決して多いとは言えません。北京を本拠地とするプロサッカーチームは別の競技場をホームスタジアムとしており、国内サッカーリーグでの利用も見込めません。中国国内メディアの報道によれば、国家体育場の年間維持費は約 5 千万元かかりますが、見学者数も年々減り、大切な収入源である入場料収入は減少の一途であるということです。また、競泳会場となった国家水泳センターや他の競技施設も同様の悩みを抱えています。

オリンピック終了後、施設をどのようにして活用していくかは、オリンピック開催地の共通した悩みであり課題ですが、北京も例外ではなく、今後も試行錯誤しながらの取り組みが予想されます。

(川島所長補佐 群馬県派遣)